

援助職の未来

1: 100年

千葉 晃央

中盤戦

人生100年といわれるなかで、47歳になった自分がいた。本当に100年であるならば、まだ私は中盤である。人生の後半を迎えるにあたり、今しておくべきことは何か？そう考え、少し自分を自由にしてみることにした。それまでは週6以上のペースで自ら納得をして、仕事をさせてもらってきた。そして、かかわってきたものの、ほとんどが10年以上させていただいていた。それらの経験を踏まえて、自分ができることをしてみたいと思ったのである。

そして、所属している組織が解決したい社会課題については、私以外にも先輩や後輩がその任にあたっている。そこにはハードもソフトも実績も信頼もある。私がもし新たな社会課題に挑んだなら、それはまだ手つかずの課題かもしれない。とにかく始めるしかないのではないかと思った。

自分で決めて、勝手な話ではあるが、本当にさみしいことであった。自分と職場は一心同体のように感じてきた。当然である。朝5時台にいたり、深夜まで熱中したり。

それを24年したところである。今の私は、ほとんどその職場の経験でできている。その職場の経験とは、当然自分だけのものではない。一緒に働いてくださった先輩、同僚、後輩、上司の方々の存在があつてこそである。さらに、未熟な私に付き合ってください利用者さんと、そのご家族の皆さんの存在は感謝してもしきれない。

まず一歩

何から始めるべきか？まずはそのあたりの本を数冊読むところから始めた。読んでみると、今後どんなことが自分の人生の課題になるかが見えてきた。本だけではなく、その課題について、その専門の方にお時間をいただき、教えてもらうことから始めよう。そう思ったのである。もうこの時点で、それまで自分が経験したことがない領域に足を踏み入れていた。不安と希望を抱えながらである。

いつもお世話になってきた、信頼できる社会保険労務士の先生にお時間をいただき、事務所にお邪魔をさせていただいた。今、

自分が考えていることをお伝えした。そして、その場合の課題、解決策を伺った。奥様が紅茶とお菓子まで出してくださった。何しろ、その先生自体が起業された大先輩でもいらっしゃる。そして当然、保険の面からもいかに対処してくかについて御教授をいただいた。

感謝

それまで深く考えたこともなかった社会保険料。被雇用者である限りは、給料から天引きされる。そして組織の昇給だけでなく社会保険料の増減他でも手取りの額は当然変わる。そこまでわかったら、それ以上は詳しくなっても被雇用者の自分の生活にはあまり直結しないのできいても覚えるこ

ともできなかったし、結果無自覚に過ごしてきた。

こうして一から制度、仕組みを自分事として伺うと、健康保険、社会保険のありがたみを感じた。結構な高額で、それをずっとこれまでの職場に払ってもらってきたことの有難みを深く、深く感じた。自分に対して、ひと月でうん十万も出してくれる。そして、そのために保険に関すること全てをしてくださっていたのである。やっとそのお世話になった方々の苦労と思いがわかってきたのである。

オフィス

では、自分の日常をどうするか。若いころに人生の大先輩に教えてもらっていたこ



とが一つある。退職したとしても、何十年も家を出て、通って仕事をしてきたので、その動きは継続した方がいいということである。これは、ずいぶん若い時に聞いてず

っと頭に残っていた。たぶん、それは自分の実体験と重なるからだろう。私の祖父は県庁を10代から定年まで勤めあげた。そして退職後間もなく体を壊した。時間ができ



た祖父はグルメに走り、肥満も手伝い、体を次々と悪くしていった。脳の血管が切れて半身麻痺になった。そして、祖母が祖父のケアを20年するという晩年を過ごした。その姿をみると、違いかたちでの人生の終盤戦にも非常に関心が高かった。とはいえ、この経験が私がこの仕事に就いた遠因の一つであること確かである。

そう、毎日通うところ…。私にはお邪魔したことがある開業しているカウンセラーさんの事務所のイメージがあった。ネット上で試しに賃貸物件を検索した。「これがいいなあ」「ネットフリーやん!」と見て楽しんでいたら、ハタと気づく。これを借りるとなると毎月の収入ノルマができる。そらそうだ。こんな家賃を払って、なおかつ生きていくには…と自分のわかっていなさぶりに強烈に驚いた。

そこで教えてもらったのが「シェア・オフィス」というところ。地元でも複数ある。早速、時間をみつけて1か所に行ってみた。下が輸入車のディーラーで、とてもおしゃれなところであった。様々なビジョンを持ち、日夜動いている方々が出入りをしている雰囲気があり、その姿を感じられる場所で刺激的であった。利用料は事務所を借りるより安価。またいろんな出会いもありそうで、興味深く感じていた。

激 励

同時にあるのは、「私は何をして生きていくのか?」という問いである。福祉学を学び、障害者福祉の現場から始まり、家族療法を学び実践、心理学も学んだ。そして、

2001年から始めた家族をテーマにした事例検討会は19年が経過した。家族のことを継続するのはできるなあと感じる。おかげさまで家族のことを援助職の方々に伝える機会もある。そのための準備も今まで以上にしっかりしていきたいと日夜思ってきた。そのためにも欲しかったのは時間である。

そして、税理士の先生にもお時間をいただいた。以前にも相談にお邪魔したことがあり、またお会いしたかったので伺った。税理士の先生も一人でお仕事を始めた大先輩である。お邪魔すると自分の体験も重ねて、たくさん話してくださった。そして強く激励をいただく。「とにかく自分の本業を確立することに徹しなさい」とご助言をいただいた。「もう自分は次の時代の人々に貢献する世代だから、いくらでもサポートする」とおっしゃってくださいました。「始めはみんな枠組み(税やら、法人やら)のことを気にするけど、そんなのは後からでも何とでもなる!大事なことは自分自身がどうやって生きていくかという本業をしっかりと作っていくことである!」と話してくださいました。なんとありがたい話だろう!

自分で決める

私の場合、次の就職先を見つけて職を離れたのではない。自分を自由にする、それを自分で決断をする、自分のタイミングでするということである。そんな経験も人生に、そう何回もないのではないか。それを可能な限り若い時にしておくのは、今後の選択決定にも影響するし、いいだろうと思った。なんせ、人生の中盤なのだから。そ

して、生活、仕事を見つめながら、できることをしていこうと思った。

そして、地元の地域活動、市民活動の活性化を目的にする京都市市民活動総合センターのスモールオフィスを教えていただいた。その利用に向けて、エントリーすることにした。センターの目的と機能、NPOの立ち上げのサポートをしてくれること等も含めて魅力を感じた。そこにはお金儲けではなく、社会への貢献という同じ思いを持ったスモールオフィス入居者が複数いる。そして、その活動をサポートしてきたスタッフの方々がいる。新たな出会いも可能性になる。エントリーに当たっては審査があった。書類では、会則、会員等の書類があり、家族をテーマにした事例検討会の方々が協力してくださった。そうしてエントリー、審査、面接を経て、3月に正式に利用が決まった。

家族支援と対人援助

ちばっち

そのエントリーに際して、付きまとうのは「屋号」である。そんなものはつけたことがない。先日の対人援助学マガジンの合宿では皆さんも一緒に考えてくださった。結局「家族支援と対人援助 ちばっち」にした。「ちばっち」。私をそう呼んでくださる方々が以前からいてくださることからである。

「家族支援」というのはよく使われ始めた言葉ともいえる。1990年代初頭に日本には家族を単位にした支援の枠組みが少ないというのが諸外国との違いであることを学んだ。そして、現場に出るとそれは事実であった。2020年の今の状況を見ても基本的には変わらない。そう感じているなら、そこに対して自分ができることをするしかないと思った。

「対人援助」とは、広く人にかかわる様々なアプローチの知恵を持ち寄って共有し、分野を超えて人に尽くす技術や理解を深める「対人援助学」の考え方が好きだからそこからいただいた。こうして「家族支援と対人援助 ちばっち」に決まった。 続く

